上田百樹年譜稿

青山英正*

はじめに

本稿は、京都の本居宣長門人であった上田百樹の年譜である。

上田百樹。明和六年（一七六九）生（推定）、文化九年（一八一二）五月八日没。四十四歳（推定）。文化四年（一八〇七）頃から波伯部氏を名乗る。名、百樹（桃樹・百木・百々幾）。屋号、鍵屋（鎰屋）。通称、藤助（藤介）・彦兵衛。京都錦小路室町西入南側に住す。寛政九年（一七九七）十一月二十一日、本居宣長に入門した。妻秀子は本居大平の門人で、城戸千楯の主宰した鐸舎社中の人でもある。

伊勢の宣長門人である益谷末寿が文化元年七月十二日付内山真龍宛書簡の中で、百樹について「地理之人の由」と書き記しているように、[1]百樹は古写本に加えて盛んに地図や地誌の収集、筆写、校合をおこなった。それは、宣長の『古事記伝』の手法に倣い、『古事記』や『日本書紀』などの神典や古伝承における地名の考証をおこなうためである。

しかし、彼の学問はそこにとどまるものではなかった。百樹は、晩年の著書『奇霊大本図考』（文化六年頃成立）と『奇原霊統図考』（同七年成立）において、高御産巣日神が世の中の善（吉・福）の、神産巣日神が悪（凶・禍）の生成を掌っているとする独自の世界観に到達した。百樹によれば、善悪はともにこの世の始原から存在し、それゆえ禍悪をこの世から払拭することは原理的に不可能である。それどころか、人の生は神産巣日神の掌るところであり、よって禍悪にほかならないとまで主張する。なぜなら、「稲穀ノ生出タルモ、死スルト云コトノアレバ、生（イカ）シムル物モ又禍ツ方ヨリ生出タル」（『奇霊大本図考』東洋文庫蔵、請求記号三―M―a―3、伴信友叢書所収、17ウ）、すなわち食物は生命を生かしむるものであるが、生は必然的にその後の死をもたらすからである。

このように、百樹は生の中に死を、善の中に悪を、ひいてはこの世の万物の中に拭いがたい禍悪を見出し、さらに、そこに伊勢神宮における祭祀と信仰の起源を見た。百樹の考えでは、内宮の正宮に天照大神が祀られ、その第一別宮である荒祭宮に禍津日神が祀られているのは、善神である天照大神が、自らの中の制御しがたい荒魂である悪神の禍津日神を畏れ、「厳重（オモク）祭ラセ給」（『奇原霊統図考』西尾市岩瀬文庫蔵、請求記号一四〇―七五、第一冊6オ）うたからにほかならない。

百樹の思想についての詳細な検討は別稿を用意しているが、[2]右のように整理しただけでも、百樹が、禍津日神をめぐる宣長の思想やこの世の生成をめぐる服部中庸の思想を取り入れつつ、独自の世界観を確立しようとしていたことがうかがえよう。かつて相良亨は、「いわゆる国学者

青山英正　＊日本文化学科　准教授　日本近世文学・日本近代文学

のなかにあっても禍津日神的思考をもった思想家の存在を私はしらない[3]」と述べたが、百樹こそは禍悪の存在を土台にしてこの世のありようや人間の当為についての思想体系を構築しようとした思想家であったと言える。

惜しまれるのは、百樹が『奇霊大本図考』『奇原霊統図考』の成立間もない文化九年に早世し、その学問を受け継ぐ者がいなかったことである。同じ京都鈴門の城戸千楯らが、百樹の遺稿を『百樹の摘葉』としてまとめたものの、晩年に百樹と本居大平の間に懸隔が生じていたことが影を落としたためか、結局刊行には至らなかった。山崎芙紗子が指摘するように、伴信友の学問形成に百樹の古写本調査や緻密な考証学が大いに与ったとはいえ[4]、禍悪をめぐる百樹の思想は、京都鈴門の中にすら継承する者を持たず、著作全てが未刊行のまま埋もれてしまったのである。

ただ、千楯や長谷川菅緒など京都鈴門の同志とはもちろん、宣長や信友、荒木田久老といった地方の和学者とも交流を持ち、書籍の貸借や書写、校合といういわば知的な共同作業によって自らの思想を形成していった百樹の事績を年譜形式で辿ってみることは、宣長学が流入した寛政～文化期における京都の学問状況や書物流通のありようなどを具体的に知るための、一つの手掛かりとして有益だろう。特に、百樹の場合、年記の入った書写奥書を写本の多くに残しており、その情報を時系列に沿って整理することを通じて、百樹ら京都鈴門の和学者たちが宣長の学問のみを妄信的に吸収したのではなく、むしろ彼らが人的交流の点でも書籍流通の点でも高い求心力を持つ京都の地の利を生かしながら、実証的かつ視野の広い学問形成をしていたことが浮き彫りになるように思われる。

百樹の著作

日本古典籍総合目録データベースには、百樹の著作として、『伊勢国村名帳』、『上田百樹答書』、『大祓詞遺考』、『大祓詞後釈余考』、『奇原霊統図考』、『佐渡国略風土記』、『太神宮旧蹟考』、『平曲雑記』、『百樹の摘葉』、『倭名抄私考』、『和名類聚抄国郡部集覧並考異』の十一点が登録されている。また、同データベース未登録の著作としては、東洋文庫所蔵の『三大考図解』（請求記号三―M―a―3、伴信友叢書所収）がある。いずれも写本である。

右の計十二点のうち、『大祓詞遺考』は現在所在不明であり、また残り十一点には、既成の古典籍からの抜き書きが含まれる。それらを除き、百樹自身のオリジナリティが認められる著作は、次の六点である。以下、成立年代順に並べる。なお、特に断らないかぎり、各書誌は年譜の当該年月日の条に掲出した。

・『百樹の摘葉』（寛政十年〈一七九八〉九月十一日～文化七年〈一八一〇〉一月成立。文政七年四月八日城戸千楯編）　書誌は寛政十年九月十一日条に掲出。
・『太神宮旧蹟考』（寛政年間成立）　書誌は寛政十二年末尾に掲出。
・『奇霊大本図考』（文化六年〈一八〇九〉十一月二十七日以前成立）
・『奇原霊統図考』（同七年〈一八一〇〉二月成立）
・『大祓詞後釈余考』（同年七月成立）
・『平曲雑記』（同八年八月成立）

百樹の蔵書印

墨長方印。縦二・九×横二・〇糎。

津市津図書館稲垣文庫蔵『近江国大絵図』（寛保二年刊、請求記号二九MN―一〇〇、稲垣七五九）より。

注

（1）小山正『内山真龍の研究』（内山真龍会、一九五〇年）四九二頁。

（2）拙稿「京都鈴門の古道学者・上田百樹――〈禍悪〉の思想家」（『近世文藝』二〇一七年七月刊行予定）。

（3）相良亨『本居宣長』（講談社学術文庫、二〇一一年）二五六頁。

（4）山崎芙紗子「伴信友と上田百樹」（『文藝論叢（大谷大学）』一九八六年三月）。

（5）同右。

凡例

・百樹に関する事項は〇で、関連事項は△で、推定の根拠などの補足説明を※で示し、適宜それぞれの後に関連資料の引用を掲げた。

・引用に際しては、「／」で改行を、「｛　｝」で括りを示した。また、私に句読点・濁点を補い、旧字体を新字体に改めるなど表記を変えた箇所がある。

・以下の書籍は、次の通り略称した。

『本居宣長全集』（筑摩書房、一九六八～一九九三年）→宣長

『荒木田久老歌文集並伝記』（神宮司庁、一九五三年）→久老

大鹿久義編『稿本伴信友家集』（温故学会、一九九七年）

→信友家集

同『稿本伴信友著作集』第一～五輯（温故学会、一九九八～二〇〇二年）→信友著作

同『稿本伴信友序跋識語集　第一輯』（温故学会、一九九九年）→信友序

同『稿本伴信友著撰書目』（温故学会、二〇〇三年）→信友書目

小山正『内山真龍の研究』（内山真龍会、一九四〇年）→真龍

『酒井家文庫綜合目録』（汲古書院、一九八七年）所収「伴信友関係書目」→酒井

『天理図書館稀書目録和漢書之部』第一～五輯（天理図書館・天理大学出版部、一九四〇～二〇一〇年）→天理

・巻数は漢数字で示し、頁数を算用数字で示した。したがって、たとえば筑摩書房版『本居宣長全集』第二〇巻一三五頁は、宣長二十135、のように記した。

年譜

明和六年（一七六九）己丑　一歳

※生年について

文化六年（一八〇九）十一月二十七日付栗田土満宛上田百樹書簡

（後掲）に、「今、明、明後年は私疫年と申候」と記されていることから、同年に前厄の四十一歳を迎えたと推定して生年を算出した。

※出身について

父祖の出所は丹波国桑田郡穴太（あなお）（京都府亀岡市曾我部町穴太）である。宣長「上田百樹がこへるによめる丹波国桑田郡なる小幡神社に奉れる灯籠の長歌」には、次のようにある。

丹波の　くはたの国の　穴太ちふ　里の御たからに　小山田の
上田のをぢは　その里を　うしはきいます　真玉つく　小幡の
神を　ねもごろに　尊みゐやひ　ぬば玉の　夢のさとしを
かゞふりて　いよゝます〳〵　たふとみて　ゐやひまつりし
そのをぢの　孫の百樹は　今しばし　京にうつり　本つ国　さ
かりをれども　その祖の　むかしわすれず　そのをぢの　ゐや
ひまつりし　うぶすなの　神の社に　御明しと　よる〳〵とも
す　油火の　それの家をら　万代に　やぶれぬくちぬ　石もち
て　ゐりつくらせて　大前に　仕奉ると　きくがむかしさ

（『鈴屋集』九、宣長十五165）

これによれば、上田氏は土地の有力者であり、産土の小幡神社を深く信仰していたという。百樹は、京に移住した後もこうした自らの出自に関心を持ち続け、この神社に灯籠を奉納したのである。

ところで、神宮文庫蔵の『太神宮旧蹟考抜萃』（天保十五年〈一八四四〉御巫（みかなぎ）清直写、請求記号一門一〇八五二）は、その書写奥書に、

此書ハ、京人上田百樹（字鑑屋藤助）ガ寛政ノコロ書著セントセシ草稿ヲ、若狭小浜ノ藩士伴州五郎信友ノ伝領シタルヲ借テ、緊要ノコトノミヲ書写ス。百樹ハ天照大御神旧都考ト号シオキツルヲ、信友穏ナラヌ名ナリトテ、太神宮旧蹟考ト改メ題セリ。凡テ此考信用シガタキ事等少カラネド、百樹ガ神忠ヲ感慨ノアマリ後葉ニ伝ヘムト、カクハ書写セルナリ。于時天保十五年四月十五日／御巫石部清直

とあって、百樹の寛政期の草稿を外宮の神官御巫清直が抜粋して書写したものと知られるが、同書の書中には、「丹波国桑田郡穴太村小幡神社式内ノ社司上田正義主云、当宮ノ辺ニ世ニ御神宮ト云伝ルアリ。」という文言が見られ、当時上田正義なる人物が小幡神社の宮司を務めていたことがわかる。同社の宮司は上田氏が代々務めており、百樹もその所縁の者であったことは容易に推測されるものの、百樹と同社宮司上田氏との具体的な関係についての詳細は未詳である。山崎芙紗子は、百樹の名が上田本家の系図には見当たらず、墓も穴太にはないという、一九八六年当時の同社宮司であった故上田正昭氏の談を伝えている。(5)

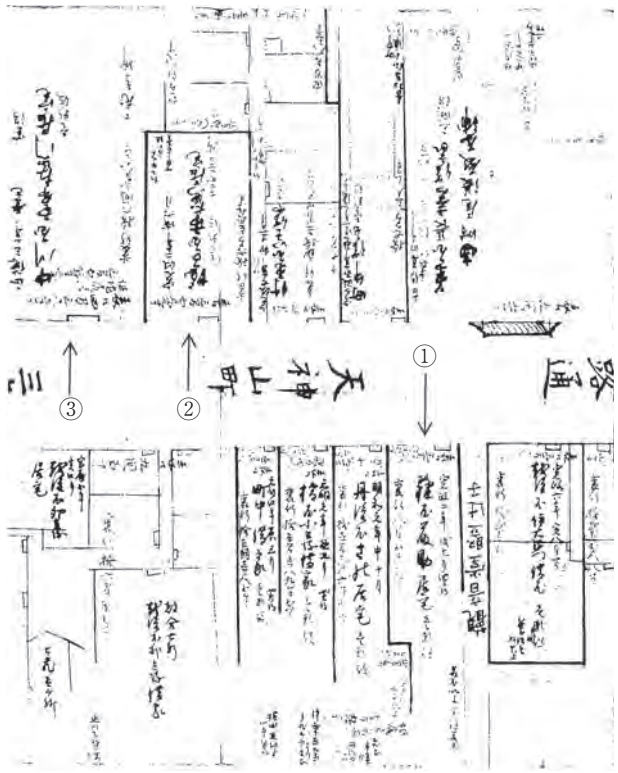
寛政二年（一七九〇）庚戌　二十二歳

○十一月　錦小路室町西入南側に転居する。

図1〔天神山町地籍図〕（文化五年、天神山町文書、公益財団法人霞天神山保存会蔵、京都市歴史資料館マイクロフィルムによる）

右図矢印①の先が百樹の居宅である。「寛政二年戌十一月買得／鍵屋藤助居宅／一軒役」「表口三間三尺六寸五分」「裏行八間二尺三寸」。

矢印②は蛭子屋市右衛門すなわち城戸千楯、③は中川屋五郎左衛門すなわち服部敏夏の居宅である。



二十440）

○八月十八日　宣長から「日本紀　一」を借りる。（同441）

○八月　　宣長から「両宮弁ひかへ本」を借りる。（同右）

○九月十一日　『百樹の摘葉』「（六十）八丁ウ本書考」成立。

※『百樹の摘葉』について

該書は、『日本書紀』神代巻についての百樹の考察をまとめたものである。現存する伝本に、西尾市岩瀬文庫本（写、大本一冊、請求記号一三六―八五）と国立国会図書館本（写、大本一冊、請求記号二〇九―七〇三）とがある。後者は前者の清書本である。

岩瀬本の書誌は次の通り。

・原装共紙表紙に橙色の覆表紙を付す。縦二六・八×横一八・四糎。外題は、左肩に「百木主／日本書紀中之考説」と墨書、それを朱筆で抹消線を引き、その右傍に朱筆（城戸千楯筆カ）で「百木の摘葉　神代巻中考説　一」と記す。

・見返しに朱筆（千楯筆）「一　一ヶ条ツヽ外題なき条々は一行あけて相写し候事／一　順次第は番付之通／一　合印つけたる処々ハ一ヶ條となりてつゞけて書へき処なり／一　脇外題一字下ケ条々の外題三字下ケ」。

・見返しと第一丁の間に巻紙（長谷川菅緒筆、修正書入は千楯カ）を挟み込む。文言は以下の通り。

無御遠慮御加筆聞え候様ニ御認希候／過にしはゝかへの百樹ぬしハ吾ともからをいにしへ学にみちひき、鈴の屋の大人に逢しめし人、よく学ひよく書よくよみて、神代の事も古きよの事もつはらにあきらめて、おのれらにかたらひて、漢学仏学に相口あへさらしめし人、其人過いにてことし年十三

寛政九年（一七九七）丁巳　二十九歳

○十一月二十一日　「上田藤介　百樹」の名で、奈須守彦、長谷川菅緒とともに宣長に入門する。（『授業門人姓名録』、宣長二十219）

△十一月　服部中庸『三大考』が、宣長『古事記伝』十七之巻附巻として刊行される。

寛政十年（一七九八）戊午　三十歳

○三月二十四日　宣長から「神代巻　上」を借りる。（『借書簿』、宣長

はしにはしにになりぬれど、吾どちむかしの心たゆまず、いやすゝみにまなび物すなるは、もはら此ぬしのあなゝひたすけられたるいさをによりたるになん、けふの祭（其）の日に書のこされし物ども、城戸ぬしの書つゞりあつめたまへるこのひとゝぢは、其かみおのれらにいひさとされし古ことにしあれば（なれば）、たへかねてやがて筆とりて、一こと（思ふこゝろを）、書のはしに書くはへつ。

・巻首（朱、千楯筆カ）「〔百樹の摘葉　一の巻／神代巻中考説〕波伯部百樹考説／　此巻ハ凡て神代巻中の考へともを論ひ集たるなり」（「此巻ハ」以下に抹消線）。

・本文、百樹自筆。毎半葉十～十三行程度、小字双行、一行二十四字程度。字高二十一糎程度。全三十七丁。紙片貼付・挟み込み多数。漢字かな交じり、一部漢字片仮名交じり。記事の削除の指示や、各記事冒頭に振られた漢数字は百樹と別筆（千楯カ）。

・「〔二〕序文考」の記事末に「文化四年四月十六日　波伯部百樹」、「〔十一〕書紀二丁左」の記事末に「右文化四年四月廿一日　波伯部百樹謹記」、〔二十五　無題〕の記事末に「文化五年六月　左京　波伯部百樹述」、「〔二十六〕越州考」の記事末に「文化六年五月　左京　波伯部百樹著」、〔四十　無題〕の記事末に「文化四年四月　波伯部百樹考」、〔五十四　無題〕の記事末に「文化四年四月十三日　波伯部百樹考」、「〔六十〕八丁ウ本書考」の記事末に「右寛政十年九月十一日　上田（波伯部）百樹考」、「〔六十六〕天蠅斫之劔（アマノハヘギリノツルギ）」の記事末に「文化七年正月　左京御民波伯部百樹謹考」の年記・署名あり。

・奥書（朱、千楯筆）「文政七年申四月八日亡友百樹之為編集之畢　城戸千楯」。

また、国会本の書誌は次の通り。

・原装共紙表紙に薄縹色の覆表紙を付す。縦二六・六×横一八・四糎。外題「百樹の摘葉　神代巻中考説」

・序文「過にしはゝかへの（中略）長谷河（ママ）菅緒」（千楯筆。若干の表記の違いと末尾の署名を除き、岩瀬本の見返しに挟み込まれた巻紙と同文。岩瀬本の修正書入を反映）。

・巻首「〔百樹の摘葉／神代巻中考説〕〔波伯部百樹考説／城戸千楯編輯〕」。

・本文、毎半葉十行、小字双行、一行二十四字程度。字高二〇・五糎。全五十六丁。漢字かな交じり、一部漢字片仮名交じり。岩瀬本における修正・書入による指示を反映。また記事末に複数箇所記されていた年記・署名を削除。

・室直助（千楯門人）・内藤耻叟旧蔵。

以上から『百樹の摘葉』の成立過程を整理すると、寛政十年（一七九八）から文化七年（一八一〇）にかけて百樹が断片的に記した『日本書紀』に関する考説を、百樹の十三回忌に当たる文政七年（一八二四）に千楯が編集した。これが岩瀬本である。千楯は、『書紀』の順に記事を並び替え、体裁を統一せよという指示を記し、また編集にあたって長谷川菅緒に序文執筆を依頼した。岩瀬本の見返しに綴じ込まれているのは、その時菅緒から送られてきた序文草稿である。そして、千楯の指示に従って筆耕（書写者不明）が清書したのが、すなわち国会本である。

○九月から十一月頃　宣長が百樹・千楯・守彦・菅緒宛に、『古事記頒

題歌集』の歌を募る書簡を出す。（宣長十七444）

○八咫烏　　上田彦兵衛　百樹○

やたがらすみことかしこみ天かけり御さきにたちてしるべをぞせし

（宣長別巻二409）

○十月九日、長谷川菅緒が、百樹から借りた平信之校合本によって茨木多左衛門版『たけとり物語』の校合を終える。

（下巻末）安永六年四月十日訂畢　平信之／寛政十年五月十日校合了。抄はたゝ何共書ぬ方、イとあるは抄の校合本也。同年十月九日平信之の校合本を百樹主より借得て校合了／長谷川

（同裏見返し）校本奥記云　此一帖以山岡明阿校本校畢／安永二年九月　賀茂季鷹／右以校本校合畢　享和三年閏正月十七日　菅緒／享和三年六月廿五日長谷川菅緒所持之本をかり得て書写之畢　浅野文成　　（東海大学桃園文庫本下巻末奥書、請求記号桃一―十二）

※享和三年二月から三月にかけて、千楯が賀茂季鷹所蔵本をもって『東遊歌図』『神楽歌』『催馬楽』（『校本風俗歌神楽歌催馬楽』所収、写本一冊、京都大学附属総合図書館蔵、請求記号四―二十九―ア一）と校合するなど、京都鈴門と季鷹とは密な交流があった。千楯が書肆として、『かりの行かひ』（享和二年刊）といった季鷹の著作を出版したのも、そうした交流が背景にあった。

○十月二十三日　伊勢に赴き、二見定津・本居大平・中里常秋・青木茂房・殿村安守とともに中川（荒木田）経雅を訪れる。

寛政十年戊午十月廿三日二見左兵衛定津、松坂田丸屋十介大平入来。松坂中里平兵衛常秋・青木恒蔵茂房・上田藤助桃樹・殿村五平安守入来。談国学。

（『経雅卿雑記』神宮文庫蔵、倉本昭「続・中川経雅の交友録――本居大平との友情（その二）」『日本文学研究（梅光学院大学』二〇〇八年一月）

※倉本によれば、享和年間にも経雅は百樹と会っているという。

○十一月十三日　宣長『神代紀髻華山陰（うずのやまかげ）』起筆。「教子なる上田ノ百樹がいはく」等として、百樹説を紹介する。（宣長六41）

※同書初稿本識語によれば、十一月二十一日に脱稿、十二月十日に清書が終わった。すなわち、百樹が伊勢に赴いた直後に宣長が本書の執筆を開始したことになる。

寛政十一年（一七九九）己未　三十一歳

△一月末　荒木田久老が上京。『万葉集』の講義を行う。

※寛政十年十二月二十五日付野田広足宛久老書簡に、「京師も万葉学流行いたし、四五輩入門有之、何れも拙子出京を相待居申候由ニ御座候」とあり（久老456）、同十一年一月十九日付野田広足宛久老書簡にも、「近々出京之積りに御座候。是も京師ニ門人出来ニて、達而上京すゝめ申候故に御座候」（久老458）とある。久老の言う「京師」の「門人」とは、久老の上京後の動向や彼の著『信濃漫録』（享和元年〈一八〇一〉成立）「清濁音便」条において千楯を門人と称していることを勘案すれば、百樹や千楯ら京都鈴門の人々を指すと考えられる。

しかし、彼らの方は必ずしも久老を師と見なしていたわけではない。大東急文庫蔵『万葉集』（請求記号四一―十三―三〇一四）の千楯書入に、宣長説を「師」、久老説を「久」と記してあるところを見ると、千楯らの認識では「師」は宣長一人で、久老はあくまでもゲスト講師であり、その点、久老側の認識とのずれがあったのか

もしれない。千楯の著『紙魚室雑記』所収の長谷川菅緒「をかしおかしのかなの説　又」（享和元年夏四月成立、日本随筆大成新装版第一期二、吉川弘文館、一九九三年）においても、宣長を「師」、久老を「久老神主」と記している。『信濃漫録』「神風のいせ」条には、菅緒が久老の説を「例の奇説ならむ」と述べたことが記されており、菅緒等は久老を「奇説」の人と見ていたようだ。

○三月二十三日　宣長から「転用例　扣本」を借りる。（『借書簿』、宣長二十442）

○三月二十五日　宣長が、千楯に依頼された色紙を認め終え、百樹宛の便に同送する。

城戸千楯頼ノ色紙認了ヌ、鍵彦便ニ頼遣スヘキ事

（『日々諸用事扣』、宣長二十320）

△四月二十二日　長谷川菅緒が久老『肥前国風土記』の序文を執筆する。

○四月　久老が百樹の古銭学に関する著書の序文を執筆する。

百の木立はおほかる中に。上田百樹はその名にも似す。かしの実のひとりたちて。皇大御国ふりをあふきたふとみ。これの御国の銭をすら。きたなきからくにのにたくらへて。そのめてたきゆゑよしをことわれる一冊をつくりて。已に序せよといふ。その論は自序につはらなれは。今はた何をかもいはむ。その木立の曲らに直く。棟とも梁ともなりなむ後を。人めつるかに。

寛政十一年卯月京師の旅寓にてしるせり　宇治五十槻久お喩

（久老412）

※この頃までは、京都鈴門の人々と久老との関係は良好であったと見てよいだろう。

○十月二十日　宣長から「記伝　十九　廿」を借りる。（『借書簿』、宣長二十443）

○十一月二十三日　『梁塵愚案抄』の校合を終える。

寛政十一年十一月廿三日古異本校合畢左京民上田百樹

（東京大学国文学研究室本奥書、請求記号中古十六・二―四）

寛政十二年（一八〇〇）庚申　三十二歳

○二月十三日　宣長から「字鏡字考」を借りる。（『借書簿』、宣長二十443）

※四月九日の記事に鑑みると、この頃百樹は松坂に滞在していたらしい。

○四月七日　宣長から「倭姫世記」を借りる（同444）。

○四月九日　松阪において、宣長から借りた「国造本紀」の書写を終える。

寛政十二年四月九日　伊勢松坂にて吾師の御本を借得て即日校写し竟ぬ　平安城　上田百樹／文化六年十一月　於京転写了。後便以覧証本加筆以圏点分別之　伴信友（花押）

（信友序61）

○四月十九日　宣長から「寛平縁起」を借りる。（『借書簿』、宣長二十444）

○五月十九日　宣長から「さき竹弁」を借りる。（同右）

○九月八日　宣長から「勢陽雑記　全」を借りる。（同445）

○十一月十三日　宣長から「風土記残へん」を借りる。（同右）

○寛政年間　『太神宮旧蹟考抜萃』成立したか。

※同書の書誌は次の通り。

神宮文庫蔵。請求記号一門一〇八五二。写本一冊。全十丁。砥粉色横刷毛目表紙。縦二七・二×横一九・一糎。左肩打付書「太神宮旧

蹟考抜萃」。内題も同じ。毎半葉十二行二十九字前後、カナ交じり文。印記「御巫私印」。奥書は前掲（→明和六年）。

享和元年（一八〇一）辛酉　三十三歳

△三月三十日　宣長が上京する。（『享和元年辛酉・上京日記』、宣長十六643）

○四月三日　宣長が百樹らを訪問する。

一、御屋敷、久米武兵衛、木村條右衛門両所へ見廻、武川幸伯へ見廻、くわし折持参ス、城戸市右衛門、はせ川猪三郎、上田藤介、七里次郎吉へ見廻、畑柳敬へ見廻。（同右）

○六月六日　宣長が、千楯、百樹等にいとまごいをする。

一、今日、畑柳敬、清水友甫、鍵ヤ藤介、橘ヤ伊三郎、服部五郎右（左）衛門、城戸市右衛門、七里次郎吉、武川幸伯等へいとまこひニ廻ル（同653）

○六月九日　宣長帰国。千楯や百樹が大津まで見送る。

一、五ツ半頃、四條ノヤトリヲ立出ツ、祇園町辺マデ人々送リ来ル、又蹴上ケマテ送リ来ル人々モコレカレアリ、サテ渡辺上総介、城戸千楯、上田百樹、服部五郎左衛門、七里次郎吉、此五人ハ、大津石場マテ送来ル（同右）

人々おほくおくりまゐらせけるに、まづ河南某は祇園の御旅にて、魚臣、千春、主忠、秦などは知恩院のわたりにて、菅雄いよ人ひだ人は蹴上にてわかれ奉るに、重名、百樹、千楯、蕃民、敏夏、粕淵は大津のうまやうち出の浜までしたひ来り。

（石塚龍麿『鈴屋大人都日記』文政二年刊、宣長別巻三168）

○四月から六月頃　宣長が百樹所蔵の青石を歌に詠む。

上田百樹かもたる出雲国意宇郡の湯の山の青石に歌こひけるによみてあたふ此石はいにしへかの国より玉に作りて奉りし石也湯の山は式に意宇郡玉作湯神社とある山也

神代（古）より世々に出雲の御ほき玉今のをつゝに見るかむかしさ

（『詠稿』十八、宣長十五511）

※なお、久老もこの百樹所蔵の石を歌に詠んでいる。すなわち、百樹は同じ石について、宣長と久老にそれぞれ歌を請うたことになる。

高天原に事はしめ給ひし天つ神ろきの珍宝と賞したまはしゝ八尺瓊の湯津御統の勾玉はいともかしこけれは言あけすへくもあらすこれのあし原の中つ国にみあもりまして後玉藻しつし出雲の国の玉作等かすれる御ほきの玉を神のゐやしとすめろきの世々に奉れる事はそれか国造か神賀詞に聞えたるを上田百樹か真玉なすまさやかなる真こゝろにいにしへしぬひて彼玉をしもまき得て家の宝と御棚にしつめて是にほき言を乞へるにこひけるまにまよみけるほき哥

水鳥の　かもの羽色の　青玉の　みつえの玉の　行相に　えたる其玉　あやに〳〵　貴きかも　かむろきの　神のゐやしと　しつめつゝ　世々につたへよ　神宝　御ほきの玉（久老272）

○六月二十六日　宣長から「神名式　九　十」を借りる。（『借書簿』、宣長二十445）

○七月十九日　内山真龍の著書を一見したい旨、石塚龍麿を通じて伝える。

石塚龍麿から百樹が真龍の著述を一見致し度い旨であると伝えたから、真龍は遠江風土記伝は一橋家に貸出中であるから、他の姓氏録註、国号考を出雲の千家清主に差遣することになってゐるから、到

着せば一見の上、清主に廻送せられ度いと申送つてゐる。（内山492）

○八月二十八日・九月一日　宣長から「神名帳　二冊　一冊」を借りる。（『借書簿』、宣長二十446）

○十月十三日　『延喜式』の校合を終える。

欠古写本トアル一之巻ヨリ七巻マテ存セル残欠之古写本ナリ。此本七冊印本ト全ク同シクテ二三異ナルノミ。疑フラクハ今ノ印本ノ原本ノ欠テ存セルナラム。享和元年十月十三日校合畢ヌ上田百樹

（岐阜大学附属図書館蔵『延喜式』慶安元年跋刊・明暦三年修・寛文七年逓修・享保八年再逓修本、第一冊扉裏識語、請求記号三二二・一三五―一七五八、国文学研究資料館マイクロフィルムによる）

○十一月七日　内山真龍が、百樹に、「春夜興画賛」「人丸神長歌」「山家花」の三枚を認めて贈る。（内山492）

○十一月二十二日　本居大平から『神鳳鈔』を借り、長谷川菅緒に依頼して校合を終える。

右神鳳抄朱青書入共以八禰宜経雅之本写之安永七年戊戌十月中旬荒木田弘明／稲掛大平主ノ所持本ヲ借得テ長谷川菅緒主ニアトラヘテ校合畢ヌ／享和元年十一月廿二日　左京民上田百樹（花押）／文化十一年三月伝領　以他本加比校　伴信友（花押）　（酒井47）

○十二月二日　『古語拾遺』元禄九年跋刊本への校合書入を終える。

朱もて書るは花輪本なり。見林としるせしハ松下氏の自筆の書入を写せし也。藍にて記せしは官庫の御本なり。墨もて記せしハ我師の講せちを、我友七里繁民かきゝ書せしを写せるなり。又菅云とあるは吾友長谷川菅緒か考なり。／享和元年極月二日　左京　上田百樹／文化三年丙寅三月中旬以学友上田百樹本書入畢　城戸千楯（花押）

（愛媛大学図書館鈴鹿文庫本奥書、請求記号ＤＩＧ―ＥＭＳＫ―120）

享和二年（一八〇二）壬戌　三十四歳

○一月九日　久老から借りた『日本書紀撰定之事』の書写を終える。

（裏表紙見返し）此書ハ久老主ヨリカリエテウツシツ　享和二年正月九日　上田百樹（花押）。　（天理一95）

○七月十五日　『日本惣国風土記』のうち「伊勢国安濃郡風土記」の校合を終える。

右一本享和二年七月十五日校合畢　上田百樹

（早稲田大学図書館蔵『残編風土記』第一冊８ウ識語、請求記号イ４―３１６３、百樹旧蔵本）

右一本、享和二年七月十五日校合畢　上田百樹／以今井似閑本校之。文化十三年六月校合了　伴信友　（信友書目148）

○七月十六日　『日本惣国風土記』のうち「大和国平郡風土記」の校合を終える。

右一本、享和二年七月十六日校合畢　上田百樹／右イ本、同年九月校合畢　上田百樹　（同147）

○七月十七日　『日本惣国風土記』のうち「伊勢国安濃郡風土記」の校合を終える。

右一本、享和二年七月十七日校合畢　上田百樹／右一本、同年九月校合畢　百樹／文化十一年戊年十月、以珍本校之　信友　（同148）

○九月　『日本惣国風土記』のうち①「伊勢国員弁郡風土記」、②「武蔵

国豊島郡風土記」、③「陸奥国名取郡風土記」および「同宮城郡風土記」の校合を終える。

①右一本、享和二年九月校合畢　百木／文化十三年六月、以今井似閑本校了　信友　（信友書目148）

②享和二年九月、江戸砂子温故誌及続編合十一冊校合書入畢　左京上田百樹／同年同月、以イ本校了　上田百樹／右武蔵国風土記、文化二年正月、信夫道別本藍校了　伴信友　（信友書目150）

③享和二年九月、奥羽観迹聞老志廿巻ヲモテ校合書入畢ヌ　左京上田百樹　（同151）

○同月　「大和国平郡風土記」と「伊勢国安濃郡風土記」の再校合を終える。（→享和二年七月十六・十七日）

○この年、小国重年と斎藤監物と内山真龍が、一條殿に神官許状を願い出るため上京し、百樹の家に寄宿する。（内山491）

文化元年（一八〇四）甲子　三十六歳

○二月　『伊賀国之絵図』の校合を終える。

享和四年二月以一図校之畢　左京　上田百樹

（津市津図書館稲垣文庫本奥書、請求記号L29M—2）

○春　信友に『神名帳考証検録』を貸す。（→文化四年四月十五日）

○四月十二日　信友と京都で面会する。

十二日　晴。イトウレシ。朝ノ内正周方ニ而無セン六百也。調出ル。長谷川菅緒ヲ□テ不逢。城戸千楯ニ逢□□語ル内、植田百樹（上）丁ニテ千楯同カギャト云来逢テ、トモ〳〵ニ何クレト語ル。明夜咄ニコヨト約ス。

（伴信友『大坂／京／奈良』旅中備忘録』、天理大学附属天理図書館蔵、信友著作二266）

○四月十三日　信友・菅緒と古道について語り合う。

黄昏ヨリ上田百木ノ宿へ行。長谷川菅緒来リ過シ、何クレト道ノ論ヲナシ、四時　旅宿へ帰。　（同268）

○四月二十四日　信友が、『日本惣国風土記』所収「播磨国風土記」百樹所蔵本の書写を終える。

此播磨風土記残冊墨附七葉、借得京人上田百樹珍蔵本自書写畢。字行随原本者也。／文化元年甲子四月二十四日　於若狭国小浜旅寓記。伴信友（花押）　（信友序25）

○五月二十日　殿村常久が、百樹本により『日本書紀神代紀』鳥谷長庸校・享保十四年跋刊本への書入を終える。

文化元年五月二十日京師上田百樹本以テ書入レヲヘヌ　殿邑常久　（天理一92）

○七月十二日　伊勢内宮の益谷大学から内山真龍に、「京上田百樹地理之人の由」という来状がある。（内山492）

文化二年（一八〇五）乙丑　三十七歳

○一月　信友が、『武蔵風土記』百樹校合本と信夫道別本との校合を終える。（→享和二年九月）

○文化二年以前（享和元年以降）『新撰姓氏録』の校合を終える。

本書（青山注——『新撰姓氏録』百樹校合本）の自筆原本は存在しないが、以下にあげる橋本稲彦私註本、伴信友校合本などによってその全貌がわかる。それらの奥書によると本書は、（一）安永六年（一七七七）十二月十六日、荒木田神主経雅本を借りて校合した本居宣長本、（二）明和四年（一七六七）正月、文明古写本すなわち建武二年系本をもって校合し、翌年十二月、原田椙菴によってさら

に校合を加えた津久井尚重本、（三）延文五年卜部兼豊一本、（四）寛文六年（一六六六）五月書写の福住道祐本、（五）内山真龍の『新撰姓氏録註』などの諸本を用いて校合してある。

（佐伯有清『新撰姓氏録の研究』本文篇96、吉川弘文館、一九六二年）

※津久井尚重は『南朝編年記略』『南朝紹運録』の著者で、宣長とも交流があった。

○文化二年春以前　伴信友が、百樹校合本を底本に、『新撰姓氏録』を再訂する。

（佐伯前掲書106―107）

文化三年（一八〇六）丙寅　三十八歳

○三月中旬　千楯が『古語拾遺』百樹所蔵本により書入を終える。（↓享和元年十二月二日）

文化四年（一八〇七）丁卯　三十九歳

○四月十三日　『百樹の摘葉』〔五十四　無題〕（『書紀』神代巻第五段一書第六「為天安河辺」云々について）成立。（↓寛政十年九月十一日）

※管見の限り、百樹が波伯部氏を名乗ったのはこの時が最初である。

○四月十五日　信友が、『神名帳考証検録』百樹所蔵本の書写を終える。

此神名帳考証検録ハ、本書に従四位上度会神主延経とありて、これ則考証なり。また、従四位上度会神主延賢訂とあるが、考証に書加へて検録と題したる也。その後、度会清在頭註、荒木田正身同、久老同、上田百木と記して、件の人々の継々に書加へたるもの也き。／（中略）そも〳〵此書ハ、過し文化元年の春、若狭より京に上りし時、上田百木にかりて齎て帰りて、興田吉従と相議りて、もちわけて書うつしたるを、後にかたみに写しかハすとて、おのれも書き、人にもあつらへかゝせなどして、やう〳〵にうつしとゝのへたるハ、文化四年四月十五日なり。（以下略）

（信友序45）

○四月十六日　『百樹の摘葉』「〔二〕序文考」成立。（↓寛政十年九月十一日）

○四月二十一日　『百樹の摘葉』「〔十一〕書紀二丁左」（神皇産霊尊と高皇産霊尊について）成立。（↓同右）

○四月　『百樹の摘葉』〔四十　無題〕（『書紀』神代巻第五段本書「青山変枯」について）成立。（↓同右）

○五月　橋本稲彦が、『新撰姓氏録』百樹校合本の転写を終える。

文化四年丁卯五月以二上田百樹本一使下人（ヲシテ）書二入校合上之一畢

（宮内庁書陵部本奥書、佐伯前掲書98）

※稲彦には、『訂正新撰姓氏録』（文化四年七月稿、文政元年刊）の著書がある。

文化五年（一八〇八）戊辰　四十歳

○六月　『百樹の摘葉』〔二十五　無題〕（『書紀』神代巻第四段「大日本豊秋津洲」について）成立。（↓寛政十年九月十一日）

○九月二十三日　栗田土満に、『日本書紀』についての自説を送る。

文化五年九月廿三日　百々幾／栗田君

（〔上田百樹答書〕奥書、天理大学附属天理図書館蔵、栗田土満雑集所収、請求記号〇八一―イ五―一一六、天理一21）。

※同書は写本一冊（百樹自筆）。表紙無し。こより綴じ。縦二四・五×横一七・二糎。有界毎半葉十行の罫紙を使用。全二丁。漢字片仮名交じり。

文化六年（一八〇九）己巳　四十一歳

○一月　『但馬考』により、『但馬国太田文』の校合を終える。

文化六年巳年正月　以但馬考一校了　上田百樹／文化十癸酉年十月伝領　伴信友　（酒井53）

△春　本居大平『古学要』成立。服部中庸『三大考』や平田篤胤『霊の真柱』を批判。

○五月　『百樹の摘葉』「（二十六）越州考」成立。（→寛政十年九月十一日）

○七月　『紀伊国神名帳』の校合を終える。

右者白鳥山院主ヨリ伝ニ来之一。而源里貞染筆。又橘良春写之畢。／宝暦四年閏二月　日／文化六巳年七月、以一本校之　波伯部百樹／文化八未年九月十二日、灯下写畢（于時在平安堀川官舎）伴信友（花押）／校合之序謾加朱批了／天保三年辰閏十一月四日　灯下写了　羽田野敬雄（花押）　（信友著作四270―271）

○十一月二十七日　栗田土満に書簡を出す。先春から本居を「廃学」する旨申し立てていることや、『奇霊霊統神図考』のこと、自らの厄年のことなどを述べる。

貴書忝拝見仕候。時節増寒御座候処、御揃弥御清福奉寿候。次（当方）無異罷有候。乍憚貴意易思召可被下候。

一、神代紀御解下巻一冊、先春より此方ニ相滞拝見仕居候。此巻之（私考等も）一二三申上度存居候へども、未取掛り不申、段々延引及申し候。何とぞ色々書立可入御覧、并ニ御解書御返上可仕候。

一、紀州表へハ、近比者文通不仕候。先春より廃学申立候而、本居御許へは掛合不申候。

一、奇霊大本神図考（当時名目を奇原霊統神図考と相改申候。此名も不宜覚え候間、追而又相改可申奉存候也）義、御尋被下候。当時最中書立居申候。其内一條ヅヽ、出来次第、可入御覧候。追々妙考も出来大悦仕候。

一、近来東国辺遊行仕度存居候処、今、明、明後年ハ（私）疫年と申候而、家内之者、不例の処へハ一向出不申、扨々込（マヽ）り入申候。右之仕合故、遊行事ハ延引相成申候。

一、神代紀之訓正し申候。乍然一本之外無之候ニ付、得不入御覧候。何とぞ〳〵御手透も御座候而、御上京被下候ハヾ忝奉存候。神代之趣ニ付而、大キ成考へども数多有之候間、何とぞ右之段御願申上候。（訓も今よく御正し被成度候）

一、先春御答申上候。思フニ淡島ハ淤能碁呂嶋ニテ、水蛭子ヲ生シヽ、時ノ胞ナレバ、不入子之例トアルハ理ナリケリ。此文は定而書様悪かりつと見ゆ。其意者御説ノ如シ。

一、従容ノ訓ノコト、予ハ此二字ハ捨テ訓メリ。カヽル処ハ皆シカシツ。

延（ホテマツリテ）二彦火火出見尊一。従容語（マヲシタマハク）曰、云々。

一、先達而御尋被下候泉国之事、追々考へ出し申候。此等も神図考中ニ入用之事故、其條出来候ハヾ、可入貴覧候。

一、京住服部中庸君、所司代様付伴信友君御上京ニ而、毎々神代事相談しゐ申候。

先者右之段申上度、早々。

恐惶謹言

巳十一月廿七日　　母々樹

土麻呂君

（巳〔文化六年〕十一月二十七日付栗田土満宛上田百樹書簡、天理大学附属天理図書館蔵、請求記号〇八一―イ5―二六五「栗田土満来簡集」所収、翻刻第一二一八号）

※本書簡の意義

百樹の生年や本居大平との関係、また主著の『奇霊大本図考』『奇原霊統図考』の成立過程を考える上で、極めて重要な書簡である。まず、右の書簡からは、百樹がこの年前厄の四十一歳であったということが推定できる。また、主著『奇霊大本図考』がこの頃までに成立し、それを『奇原霊統神図考』と改題したという事実がわかるだけでなく、「妙考」や「大キ成考へ」が次々と浮かんで興奮している様子もうかがえる。

その一方で、和歌山の大平とは疎遠になり、「廃学」まで申し立てていたらしい。大平はこの年の春『古学要』を著し、服部中庸『三大考』や平田篤胤『霊の真柱』を、「無用長物（イタヅラゴト）」、「日月星の運行遠近を度（ハカ）り得たりとても」「神の道を学ぶには益なき事」（引用は岩瀬文庫本による）と批判していた。本書簡にあるように、中庸と「神代事相談し」ながら考察を進めていた百樹にとって、そうした大平の姿勢は容認できないものであった。

本書簡は、宣長没後の鈴屋門人間における路線対立が顕在化してゆく過程を、生々しく物語っている点でも貴重である。その対立は、文政六年（一八二三）に平田篤胤が上京した際、城戸千楯が篤胤排除に動いたことで決定的な局面を迎えたため、京都鈴門はこれまで、おしなべて歌文制作に専念した反篤胤派であったかのように理解されてきた。しかし、京都鈴門の一人である百樹が服部中庸と交流しながら考察を進め、その百樹と密な関係を保ちつつ千楯らが学問形成をしていた事実を踏まえれば、従来のような京都鈴門の位置づけには修正が必要であろう。すなわち、千楯らは当初から『三大考』に背を向けていたのではなく、むしろ百樹の没後、大平の意向に添う形で百樹の路線から離れていったと考えられるのである。

※『奇霊大本図考』の書誌は次の通り。

東洋文庫蔵。請求番号三―M―a―3（伴信友叢書所収）。写本一冊（百樹自筆草稿）。薄縹色布目表紙（後補）、原装は共紙表紙。縦二三・九×横一六・〇糎。外題「古事記伝追補奇霊大本図考　全」（左肩、簽、書）。前遊紙一丁（文政十三年二月十五日付伴信友宛城戸千楯書簡〈後掲〉貼付）。前付一丁（序・凡例・目次）。内題「奇霊大本図考」。本文墨付十九丁（丁付「一」～「十四」、第十五丁以降丁付なし）。毎半葉十行二十三字程度。小字双行。漢字片仮名交じり。後遊紙一丁。尾題・後付・奥書ナシ。印記「服部氏文庫」（朱文長方。信友の門人服部布古の印）。

○十一月　信友が、『国造本紀攷註』百樹書写本の転写を終える。（→寛政十二年四月九日）

文化七年（一八一〇）庚午　四十二歳

○一月　『百樹の摘葉』「〔六十六〕天蠅斫之劔（アマノハヘギリノツルギ）」成立。（→寛政十年九月十一日）

○二月　『奇原霊統図考』成立。

※『奇原霊統図考』の書誌は次の通り。

・統一書名は第二・四冊の外題および第四冊の内題による。

・西尾市岩瀬文庫蔵、請求記号一四〇―七五。

・写本四冊（百樹自筆草稿）。朱色表紙（後補）、原装は共紙表紙。

縦二七・五×横二〇・一糎。

・外題（原表紙による。以下同じ）第一冊「奇原霊統神図考／第六八十禍津日神大禍津日神　條」（中央、打付書）、第二冊「古事記伝追補奇原霊統図考第四之巻之内／第九　須佐之男命條　草稿」（同右）、第三冊「伊邪那岐大御神御詔分図」（左肩、打付書）、第四冊「古事記伝追補奇原霊統図考／卜事　艸」（中央、打付書）。

・内題、第一・二冊ナシ。第三冊「伊邪那岐大御神御詔分図」。第四冊「古事記伝追補奇原霊統図考／神産巣日神條　餘考／卜事」。

・第一冊九丁（墨付八丁、丁付「一」～「九」）、四周単辺、毎半葉九行二十三字程度、小字双行、漢字片仮名交じり。第二冊十一丁（丁付「一」～「七」、丁付なし、「五」、丁付なし二丁）。一～七丁は無辺、十行二十四字程度、漢字平仮名交じり。八～九丁は四周単辺、小字十八行二十三字程度、漢字片仮名交じり。十～十一丁は四周単辺料紙の裏を用い、十行二十四字程度、漢字片仮名交じり。第三冊十五丁（丁付「七」～「十八」、丁付なし、「十九」～「二十」）、四周単辺、九行二十三字程度、漢字片仮名交じり。第四冊十一丁（墨付十丁、丁付「一」～「十一」）、四周単辺、九行二十字程度、漢字片仮名交じり。

・第三冊の付箋に、「文化四年四月　波伯部百木」、「右文化四年五月考　波伯部百樹」とあり。第三冊奥書「文化七年二月　左京御民波伯部百樹謹考」。第一冊原表紙左下に「墨付十一枚　信友改記」、第二冊原表紙右下に「墨付二十二枚／信友改記」と墨書あり。

○七月　『大祓詞後釈余考』成立。

※同書の書誌は次の通り。

西尾市岩瀬文庫蔵。請求記号一三六―七六。写本一冊（百樹自筆草稿）。朱色表紙（後補）、原装は奉書紙表紙。縦二六・七×横一八・八糎。外題「大祓詞後釈余考　全」（中央、打付書）。前遊紙一丁。内題「大祓詞後釈余考」。本文墨付二十五丁。後遊紙三丁。丁付「一」～「廿八」。毎半葉十行二十二字程度。小字双行。漢字平仮名交じり。奥書「上件文は、中臣祓気吹抄と云書あり。其書乃奥に、創禊弁と云書を附たり。共に享保年間に、源義俊が作と誌せり。（中略）此書の中に云る、おもしろしと思ふふしを摘出、予が思ふことをも添て、大祓詞後釈余考と題けつ。祝詞考及後釈に云れたるハ皆省けり。併べ考ふべし。文化七年七月。左京波伯部／百樹」。

○十月　足代弘訓が、百樹所蔵の『神宮儀式』の書写を終える。

文化七年の十月、京都人上田百樹の本もてよみくらへ訓点をも写し加へつ／度会弘訓／天保四年三月廿二日荒木田久守神主の本もてふたつ校合を加へり／亀松吉大夫西言直

（茨城大学附属図書館菅文庫本奥書、請求記号二3五）

○この年　『多度寺縁起資財帳』の書写を終える。

此本原巻物なりしを如是写させつ／文化七年　波伯部百樹

（津市津図書館本奥書、請求記号L18―4）

○この年　『常陸国風土記』などの松下見林旧蔵書を購入。（→文化八年三月）

文化八年（一八一一）辛未　四十三歳

○三月　前年に購入した松下見林旧蔵『常陸国風土記』に、伴信友の説を書き入れる。

右ハ我友伴信友主の読考へられたるを文化八年三月に写しとりたる

なり　上田百樹／同学京人上田百樹文化七年のころ都の或家にて松下見林子が蔵書ども買得たる中に此書ありしよし也同八年四月京にのぼりたる時百樹が手より借得て写せり　夏目甕満／右常陸国風土記壱巻文政漆年春三月借萩園翁所蔵書写之畢　三川国人　源敬雄（花押）

（岩瀬文庫本奥書、請求記号二五―一五〇）

○四月　夏目甕麿が上京し、『常陸国風土記』百樹所蔵本の書写を終える。（→文化八年三月）

○八月　『平曲雑記』成立。序文は城戸千楯。

※同書の書誌は次の通り。

・天理大学附属天理図書館蔵（竹柏園旧蔵）。請求記号九一〇・二―一四三九―八三六。写本一冊（百樹自筆草稿）。紺色無地表紙。縦一三・四×横一九・四糎。外題「平曲雑記　完」（中央、朱筆、打付書）。目録題「波多野流平曲雑記目録」。内題・尾題「平曲雑記」。全五十五丁（序一、目録三、本文五十、跋一）。丁付「目一」～「目三」、「一」～「五十」。

・序「平曲雑記序／おかしきふしも、かなしきふしも、物に著はしたるを読もて行ば、自然あぢはひしらるれども、そは書好む者の上にこそあれ、なべての人をあはれと思はするは、謡ふにぞ有ける。されは平家物語と云ッ書よ、往昔より琵琶ひきあはせて謡ひ物にするを、吾学びの友、波々伯部の百樹ぬしの、ふみ読に倦たらん時の名草に、それよき物とて物せらるゝを、折々聞しに、声の文いとおかしく心もすみわたりて、実其世のありさまもさぞと思ひ出らるゝばかりなりき。されば書学ぶ者のくせとて此ぬし其道にたづさはりたる、何くれのことのもとゞも考へ出て、つばらかにときあかされたるを、平曲雑記と名けて、予にはしがきせよとあつらへられしに、其筋しらぬ者の、めでたゝへんもおこがましけれど、此君のいとくはしきはさるものにて、かのあはれにおかしくきゝなさるゝをさへ、いかでめでざらめや、たゝへざらめやは／文化八年八月　城戸千楯」。

・跋「こは年ごろ我思ひよれる筋ども書集めて、平曲考と題け、三巻となし置るを、我うるはしき友の見出て、あながちに乞ければ、いなみがたくて、先彼考の上巻を撰みて、そが中なる秘事どもは、皆除きて、平曲雑記と名けて、あたへしなり。予元来此道得たりと云にしもあらねば、なべての人はうけひかずて、中々になめげなりなど思ふべかめれば、同じ意の人をおきては、おほやけになしがたきものぞ／文化八年の秋　もゝき」。

※千楯の序文からは、百樹が平曲に堪能で、研究の合間に折々謡っていたことが知られる。学者の癖として、関連する事柄を探究せずにはいられないというのも微笑ましい。また、自跋によれば、百樹には『平曲考』という三巻の著作があった。百樹の関心は、古道を中心として多岐にわたっていたと言えよう。

○九月十二日　信友が、『紀伊国神名帳』百樹校合本の書写を終える。（→文化六年七月）

○九月十六日　信友が、『隠岐国神名帳』百樹所蔵本の書写を終える。

右隠岐国神名帳、借得京人波伯部氏之珍蔵書写了／文化八辛未九月十六日比校加朱点　於平安二条堀川　伴信友（花押）

（酒井30）（信友著作四259）

○この年　『神祇年中行事』を書写する。

波伯部百樹乃請借人を雇いて之を写す。

（京都大学文学部国語学国文学研究室本識語、前掲注4山崎論文）

文化九年（一八一二）壬申　四十四歳

○五月八日　死去

こは京人上田又波伯部百樹（字鍵屋藤助）がみづから書たる倭姫世記訂正注意の草稿なり。おのれさきに京に在りし時、百樹と親しく学びたるほど、文化九壬申年五月八日身まかりぬ。（寺町四条下ル所大雲院ニ葬る。法名高誉心勁百樹居士）いとまめやかに志あつかりつるに、あたらしくかなしきこと、いはんかたなし。その妻、名を秀といへり。ざえありてこゝろばせもたゞならず、百樹が書著さむとかまへたる本書どもの、かたなりにて何くれとちりほひてありつるを、おのれにとりあつめてよと、ねむごろにあつらへたるによりて、これかれとわかちしたゝめてあたへつるを、おのれ江戸に帰りて後、かの下書どもをば、人にあつらへて別に書たるをばおくりおこせつ。大かた反故のやうにてあるが中に、こは一とぢにしてよむべくものしたれば、へうしをものして、其よしを書つけおくになむ。かくて秀女は、ほどへてことし（※青山注――天保六年）三月十日に身まかりぬと、百樹がとり子の藤助といへるが、告おこせたる。又さらにあはれにて、かくものしたるなり。

（伴信友「倭姫命世記註稿」、信友家集252）

あはれ波伯部の百木のをぢい、天翔りより来まし、聞し食したべ。をぢいはやくより、鈴屋の宇斯の教児として、古の伝の書ら、よく〳〵明らめて、たまちはふ神の御国の、もとの真の幽事の深きゆゑよしを始めて、いにしへにありとありし古事の、真の道のおもぶきを、深く尋ね細にもとめて、おもひかねのいたらぬくまなく、心にえられつる、そが余りの條々をこゝらの書どもに書きあらはしてむと思ひおこして、まづ何くれとその下書をなも、はじめ給へる中に、奇霊神図考と号けたるものには、天地のはじめの時、継々に成り出でませる三柱の大神たちの御霊に始りて、神々の生り出でましゝその御いさをによりて、国々のなりたらひ、青人草の世に有りふるさま、世のなかの吉事凶事の行きかよふ理など、すべてそのもとの真の理を、古の伝によりて、今の現の世の中に、かむがへあかされたるは、あるが中にもことに世に類ひなきいそしみにぞありける。しかるを信友かくをぢなきを、いかにして霊あひつらむ。此の道のまなびの為には、兄弟となりてむと契りて、うらなく語らひ、かの考の書の下書の條々の、いつもなるや遅しと、まづおのれにと、ねもごろにかたらひ給へる事の多かりしによりて、其のおむかしき説らを早く聞きしり、をぢなき心の怠りて、梓弓引きたわみたるをり〳〵も、打ちおどろかされければ、またなく思ひたのみてありつるものを、あはれ幽事は、すべなきものよ。かなしきかも。うれたきかも。去年の五月の八日の日、あたらしきうつそみの此の世をおきて、八十くま手にかくれ、身まかり給ひし事、其のをりしもしりへの事とる家刀自の、旅ゐせられしほどなりければ、言ひ残さまほしき事どもゝ止め給ひけむ。かの書らかき給へずして、いかにくやしかりけむ、とおしはからるゝに、今はおのれもたゝむき、ほふり失はれたるがごとおぼえて、せむすべなく、悲しく心まどひのみぞせらるゝ、しかるに此の頃、家刀自のあとらへ給へるまに〳〵、かの書きさし置かれたりつる書籍どもを受けとりて、下書の紙の一ひらも、はふらさじと取りあつめ、はたとぢつゞりて、もとの秀庫に返しまゐらせつ。這ふしみ虫の災なく、世の遠永に持ちつたへ給ひね。

後つひにをぢの霊たはりて、思ひ兼ねふかき人のいで来りて、なほ考へ添へて書き継ぐ事、はたありなまし。おろかなる己れも、仕へのいとまの、ひまだにあらば、たゞにあらじといひちぎりぬ。をぢい今より後、うしろやすく罷りありて、家継の子の八十つゞきに、うからやからを護りさきはへて、いやます〳〵にさかえしめ、又同じ学びの友らをも助けまもらひて、はた然るべき人に霊をそへ、あなゝひてなほも、をぢの意の如く、考へさし置きつる事どもを、説き明らしめ給へと、涙さしぐみ胸ふたがりつゝも、申すことのよしを、まつぶさに聞こしをしたべとまをす。あはれ。

（伴信友「誄波伯部百木詞」、信友家集203―204）

文化十年（一八一三）癸酉

○五月十四日以前　千楯が、百樹所蔵本売却の世話をする。

百木所蔵本共売却、千楯世話いたし候由。すべなき御事、今更ニ相歎候。同人在世ニ所持の本ニ、神名帳・和名抄ニ頗書入有之候。如何いたし候や。右二本、全快之後借用いたし見申度事共ニ御座候。何れニ有之哉。御序聞置可被下候。又神名帳カクロクと申書、売候ハヽ求たく奉存候。とひし也。又売候ハヽ買へる書林より求申度、御序御聞可被下候。

（文化十年五月十四日付伴信友宛植松有信書簡、『伴信友来翰集』28―29、錦正社、一九八九年）

文化十一年（一八一四）甲戌

○十月　信友が、『日本惣国風土記』「伊勢国安濃郡風土記」百樹校合本と他本との校合を終える。（→享和二年七月十七日）

文化十二年（一八一五）乙亥

△冬　京都鈴門の学問所鐸舎開設。

文化十三年（一八一六）丙子

○六月　信友が、『日本惣国風土記』「伊勢国安濃郡風土記」百樹合本と今井似閑本との校合を終える。（→享和二年七月十五日）

文政七年（一八二四）甲申

○四月八日　百樹の十三回忌に合わせて、千楯が『百樹の摘葉』の編集を終える。（→寛政十年九月十一日）

○九月十八日　植松茂岳が、千楯と鍵屋藤介を訪ねる。（植松茂『植松茂岳』第一部138、愛知県郷土資料刊行会、一九八八年）

※植松茂は、鍵屋藤介を百樹のこととしているが、伴信友「倭姫命世記註稿」に「百樹がとり子の藤助といへる」とあるのに照らせば、百樹の養子を指すと考えられる。（→文化九年五月八日）

文政十三年（一八三〇）庚寅

○二月十五日　百樹夫人秀から、百樹の遺稿が千楯を通じて信友に贈られる。

（伴信友による朱筆書入）文政十三年二月十五書状之副書　波伯部百樹遺稿　後室ヨリ贈来候副書也／京錦小路室町西入　溢（ママ）屋藤助百樹（朱終）

二白。波伯部後室より別封参り申候。御達ニ申上候。是ハ故桃樹翁之草稿物ニ候。尊家様ニも御苦労被下候品ニ存候。京地ニも被相頼

写し取置候ニ付、元書被差上由ニ御座候。寄霊（ママ）大本図一枚、先年見受申候。紛失之様子ニ而相見え不申候。即右壱本御落掌被下候。以上　千楯／伴大人

（東洋文庫蔵『奇霊大本図考』前遊紙に貼付）（→文化六年十一月二十七日）

※資料の閲覧に際して御高配を賜りました諸機関、とりわけ図版・翻刻掲載を御許可下さった、津市津図書館・公益財団法人霰天神山保存会・天理大学附属天理図書館には深く感謝申し上げます。